

必読となる非常な労作だからである。むしろ、本書から示唆を受け、さらに深めていくべき問いを与えられたようにも思う。

(滋賀文教短期大学教授)

今高義也著

『内村鑑三の世界像——伝統・信仰・詩歌』

(ペリかん社・二〇二〇年)

長野 美香

一、アプローチの独自性

内村鑑三という巨大に過ぎて一筋縄ではいかない人物の全体像を掴もうとするのは、きわめて難儀な営みである。巨人のどこに取りつこうとするかによって見え方も異なってくるが、それらを総合しようとすると、また像がぼやけてきて焦点が定まらなくなってしまうようなところが、内村という人物にはある。結局はぼやけている部分を地道にひとつひとつ埋めるべくにか手段を探していくしか、内村に近づく方法はないのだろう。

本書は、この気の遠くなるような営みに、わけても地道で堅実な方法で取り組んでいる。その最たるものが、内村の蔵書に残された内村自身の書入れから、内村の信仰上の重要事や伝統思想との関わりを探り、それが従来いわれてきたことと合致するか否かを確認する方法である。

自分自身のことを省みると、若い頃になにげなく線を引いたり、メモを書き込んだり、マークをつけたりした本を後年に開

いたとき、それらがいったいどういう興味によって、何のために引かれた線なのか、何のための書き込みなのか、さっぱりわからず、本当に自分がしたことなのだろうかと呆然とすることがままある。自分と内村を比べてもしかたないものの、内村があるとき蔵書に書き込んだことが、本当に内村の本心であり、思想的な根拠・証拠となり得るのかと疑ってみることもできないわけではない。しかし、本書はそのような不安をもって読み始めても、途中でその論の合理性に納得させられる仕組みとなっているのである。

ひとつにはそれは、疑う余地のない書入れのみを熟慮のうえで参照しているということが読み取れるからなのだが、さらに肝腎なことは、それらの分析において、従来内村についていわれてきたさまざまな言説、内村の信仰や思想についての研究史と照合し合致させ、それらの説を補強する新たな証拠として書入れを用いていることにあるといえる。それゆえ従来いわれてきたことは内村の書入れからも明らかだと読者を納得させ、さらに内村の信仰の深みへと誘う力をもっているのである。

このような新たな証拠の発見は、書入れの分析のみにとどまらない。たとえば藤田東湖「正気歌」の内村自身による引用や、二宮尊徳『報徳記』の *Japan and the Japanese* 執筆時における翻案といった具体的な事例を分析しながら、それらの事例と近い時期の内村の〈世界像〉の裏づけとしていく論考や、またそれまで主として自伝類から議論されていた内村の信仰上の転機

について、あらためて書簡を一次史料として再考を試みる論考などもあり、それらにおいても多くの原文の引用によって着実に証拠を積み上げていくのである。

しかし、それだからといって、本書が細かい分析に終始しているということではまったくない。全体としては、無教会や再臨信仰、内村と日本といった直球の大問題にアプローチしようとしているのであり、その意味できわめて骨太な内村論なのである。

二、内村と〈日本〉

さてその直球のひとつ、内村と日本の問題が論じられる際に、念頭に措かれているのは、まずは次のできごとであるようだ。

「基督愛国」の信念とともに帰国した内村にとって不敬事件は、いわば *Tesug* によって自らの内なる *Japan* が徹底的に審判され廃棄された経験であった。その廃棄体験の深刻さは、そのまま内村の内なる〈正気〉＝伝統思想の根の深さを示すものであり、それゆえ不敬事件による〈故郷喪失〉の衝撃は深刻をきわめた。(終章、二七七頁)

「帰国」とは *How I Became a Christian* にも描かれた、若き日の米国生活を終えての帰国である。また周知のように、不敬事件とは、第一高等中学校での「教育勅語奉読式」において囁託教員であった内村が起こした「不敬」事件(二八九一年)を指す。本書では、明治天皇の宸書に対する内村の「小さな低

頭」による「不敬」は、そもそも「愛国的基督信者」として「奉読式にあえて出席して」「天皇に対する表敬」を果たすつもりであった内村が、想定外にもその場で宗教的な「礼拝的低頭」を要求される事態に直面し、「ためらい」の結果起こしたとされる(第二章、六二頁)。

そのように「愛国的基督信者」を自任していた内村が、事件によつて思いがけず「国人に捨てられ」(「基督信徒のなぐさめ」)た事件は、内村と(日本)・(伝統)との葛藤がもつとも表面化した時であった。

しかし、内村はその死の前日にさえ「古稀の祝いの強飯を食べて死ねば日本武士として此上なし」と述べたという人物である(石原兵永「身近に接した内村鑑三」)。内村のこのような武士の自任は、内なる「*Self*」を「徹底的に審判され廃棄された経験」を経て続いた。それは(乱暴な括りながら)幕末から太平洋戦争にかけていびつに膨脹していった「愛国」とは異なるが、しかし内村は生涯をかけて「*Japan*」という根を自覚していたのである。

三、「先哲像伝」の書入れから

そのような内村の問題を論じる試みとして、伊藤仁斎に対する共感を論じた第七章は、切り口として興味深い。

本書はまず、内村が *Japan and the Japanese* (*Representative Men of Japan*) で描いた日本の思想家・宗教家の姿は、西欧由

来のピューリタン主義を日本に投影した「幻影」にすぎないとみなす見方を紹介する。その一方で、内村の代名詞ともいえる無教会主義も、輸入・既成の教会に対するアンチテーゼというよりも、日本の精神伝統に根差すものであるとする議論を取り上げ、以下、後者の主張を補強するべく、内村の伊藤仁斎への言及を検討していくこととなる。なお同様に、第四章の『報徳記』の翻案をめぐる議論でも、内村の描いた二宮尊徳像は内村の内にある伝統思想を示唆するものであり、キリスト教を尊徳に投射したものと断じることができないとしている(一三二頁)。

さて、伊藤仁斎である。内村による仁斎への言及の主なものは一九一五年、一六年、一七年に『聖書之研究』誌上に発表されている。この時期の内村は「第一次世界大戦の勃発による西欧諸国への失望に伴い、形成期にあつた「日本的基督教」の〈源流〉たる日本の伝統を改めて見極めようとしていた」(二一〇頁)という。そこで本書では、この時期に集中する仁斎への言及において内村が参照したテキストが、内村の蔵書『先哲像伝』であることを書入れによつて確認し、そこから内村が仁斎の何に共感したのかを探っていくのである(蔵書には『先哲叢談』も遺されているが、内村は『叢談』の仁斎伝は採らず『像伝』を使用したとのことである)。

そのなかで本書がもつとも注目しているのは、仁斎を「生涯処士をもて終る」とした『像伝』本文に内村の書き入れた傍線

である。蔵書の当該部分の写真が付されている(二二二頁)が、躊躇のない線の引きぶり、内村がこの部分に関心を寄せていることは疑う余地がない。これに続く「利禄に移されざる斯の如し」にも傍線がある。

仁斎について言及のあるものうち、一九一五年に書かれた「寧ろ儒者に倣ふべし」(『聖書之研究』一八〇号)では、この部分の『像伝』の内容がほぼそのまま使われている。そのうえで内村は仁斎を「ルーテル以上の独立の士」と称揚し、返す刀で教会や伝道会社に癒着する当時の「所謂福音士」を批判する。

日本のキリスト者として、他とは一線を画して「独立」であろうとする自身を、内村は仁斎の生涯に重ね、「我等は仁斎の堀川鬻に倣ひ、教会に由らざる自立の聖書学校を起すべきではない乎」と発憤するのである。

このほか『像伝』の仁斎に、内村は「書籍の人」、「平民の友」といった点をも読み取って自分に重ねた。「平信徒による聖書研究を通し独立伝道を展開する無教会」(『日本の基督教』)の形成を目指そうとした内村(二二三頁)にとって、仁斎こそ共感に値する先人だったというのである。

ちなみにこの章の末尾では、新保祐司の指摘に触れて、興味深い推測が行われている。不敬事件後、それぞれに事情があった大阪の泰西学館、熊本英学校の教職を次々に退いた内村は、一八九三年、京都で貧困のなか本格的に著述活動を始める。その際、一時住んだ場所が仁斎の古義堂からわずかのところにあ

って、それゆえ内村は古義堂を実際に見ただろうというのが新保の指摘である。本書はこの指摘を承けて、そのときの印象が、先の「仁斎の堀川鬻に倣ひ、教会に由らざる自立の聖書学校を起す」という構想の端緒となった(すでに京都時代に胚胎していた)(二二三頁)とする。このようなささやかな点と点との符合が、巨人内村の像を少しずつ明瞭にしていく。これが本書の特徴のひとつである。

四、「我等は四人である」——ルツの死

ここまで内村にとっての伝統思想の問題を見てきたが、内村の信仰を最終的な境地に導いたのは、「キリストの再臨による死者の復活と〈万物復興〉の希望」(二〇三頁)であり、このことは伝統思想の問題と、とりあえずは一線を画している。本書はこの問題も同様の方法で詳細に論じていく。

ここでは、内村が娘ルツの死の翌月に発表した詩「我等は四人である」(『聖書之研究』一三九号)を、内村が札幌農学校以来親しんできたとされるワーズワースの、特にWE ARE SEVENと比較することにより、内村による〈読み替え〉と信仰上の飛躍をこれまで同様に詳細な比較検討によって立証しようとする第六章を紹介したい。

本書の説明を借りれば、WE ARE SEVENは「七人の兄弟姉妹のうち妹と兄を失った少女に、「私」という話者が現在の兄弟の数を繰り返し尋ねるが、少女はいつまでも「我等七人」

と言いつけるので、大人の「私」は閉口する」（二九四頁）ということの歌われた詩である。

内村はこの詩を若い頃から愛吟したようだ。ワーズワースのいくつかの詩について、内村は「『来世』の存在を信ずる「信仰」、換言すれば〈靈魂不滅〉の思想」を謳うものとして評価しているという。ただしワーズワースのこのような靈魂観はキリスト教的なものではなく、プラトン思想の影響によるとするのが、ワーズワースの解釈としては一般的なのだそうだ（一八八頁）。それにもかかわらず内村はこの詩を〈読み替え〉て、ルツの死の直後に「我等は四人である」を発表した。

内村はまず詩の話を變更し、自身の独白体とした。さらに *WE ARE SEVEN* では兄妹を失った少女が我等は七人であるという主張をひたすら繰り返すのに対して、内村は、ルツの死後も家族が「四人」であることの意味が内村の内面において順を追って変化・展開していくこと自体を詩にしたという。それは次のようなものである。

「我等は四人である」では、まず「我等は四人であつた」とルツの生前を思い起こし、その死を経ても「今尚ほ四人である」と思おうとするが、「地の帳簿に一人の名は消えて、天の記録に一人の名は殖えた」以上、「彼女は今は我等の衷に居る」のみであるという現実が語られる。しかしそのあと一転して、「我等は何時までも斯くあるのではない」、なぜならキリストの再臨と死者の復活、万物の復興によって「我等は再び四人に

成る」からである、と結ばれる。

この詩の他、同時期の『聖書之研究』への寄稿からも、ルツの病状が重篤となった頃から内村のうちにキリストの再臨への期待が切迫してきたことが知られると本書は続ける。それらも踏まえて、「我等は四人である」は「ワーズワース詩からは読み取り得ないキリストの再臨による死者の復活と〈万物復興〉の希望」を謳う詩へと〈読み替え〉られたというのである（二〇三頁）。かつての内村は、ワーズワースの詩を愛吟しつつ、素朴な来世への願いを抱いてきた。しかし、その願いはルツの死を経てキリストの再臨、死者の復活と万物の復興という、内村の終末観の到達点へと変貌を遂げた。本書ではこのことを〈靈魂不滅〉思想の「克服」（二〇三頁）とする。

ただし、ここでの〈読み替え〉とは、ワーズワースにプラトンのものを見出したからワーズワースを捨てたということでもなく、さらにいえば「来世」があるという信仰それ自体の否定でもないだろう。要は、信仰上における「来世」のビジョンが内村の内面において飛躍したのである。〈読み替え〉とはそのことを指すと考えられる。

ちなみにルツの死と「我等は四人である」の発表は一九二二年だが、いわゆる内村の再臨運動は一九一八年から一九一九年にかけて展開された。ルツの死が内村の再臨への希望に火をつけてから六年ほど後のことである。

五、おわりに——さらなる問いへ

最後に、本書の研究方法が堅実で精細であればこそ湧いてくる新たな問いに触れたい。

本書にも述べられているように、内村は「日本的基督教の形成を指そうとした」(二三三頁)日本人キリスト者の嚆矢である。しかし、その「日本の基督教」の〈源流〉たる日本の「伝統」(二二〇頁)とは何から何までを指すのだろうか。

あらためてそのように考えるとき、内村が不敬事件で世間から突きつけられたものも、また彼自身の倫理観として生涯保たれた〈武士〉の自覚も、死の床で慰められたという紀貫之の歌(第五章)も、いずれも〈日本〉や〈伝統〉に連なるものでありながら、それらの内実は同じではなく、時には対立するものであることに思い至る。

おそらく内村に関わる〈日本〉や〈伝統〉は今後さらに詳細に分析・整理される必要があるのでろう。本書の研究とその方法は、このような方面の内村研究に先鞭をつけたという意義をももっているのではないだろうか。

(聖心女子大学教授)

望月詩史著

『石橋湛山の〈問い〉』 ——日本の針路をめぐって』

(法律文化社・二〇二〇年)

武藤 秀太郎

本書は、一般に「小日本主義」の提唱者として知られる石橋湛山(一八八四—一九七三)の思想について、多角的に考察・再検討をこころみたまものである。筆者である望月詩史がこれまでとりこんできた石橋湛山研究を一書にまとめたものであり、同志社大学に提出した博士論文「石橋湛山の政治思想——思考方法から読み解く」が原型となっている。第三章に収録された論文がもつとも早く二〇〇八年に書かれており、十年以上におよぶ筆者の石橋湛山研究の集大成といえよう。

「序章」の整理にしたがえば、石橋湛山研究史は、(一)長幸男や松尾尊発、鹿野政直らにより、大正デモクラシーのフロントランナーたる「急進的自由主義」者としての湛山像がえがかれた一九六〇〜七〇年代の第一段階、(二)大正デモクラシー期にとどまらず、湛山の思想を生涯にわたり総合的に評価するとともに、湛山の「小日本主義」にスポットがあてられた増田弘や姜克實に代表される一九八〇〜九〇年代の第二段階、(三)二〇〇〇年代以降の第三段階と、大きく三つに区分できるといえる。第三